

戦後における小学生の意見文の変化の様相

石 丸 憲 一

『教育学論集』第67号

(2016年3月)

戦後における小学生の意見文の変化の様相

石 丸 憲 一

はじめに

「書くこと」の指導について、平成10年版小学校学習指導要領より「作文」という語が見られなくなって以来、生活作文から論理的文章に「書くこと」の内容や題材がシフトされることになったと考えてよいだろう。これにより、学校現場での授業実践を見る限りでは、生活作文の指導についての位置づけが曖昧になっていると言える。では、「書くこと」の中心的なジャンルとなった論理的文章の指導は充実することになったと言えるだろうか。

このことに関して、最近の国語科教育における教科書の単元構成や実践の場を見ると、観察文や報告文、新聞、パンフレットなどの主に事実を書き連ねるような文種では充実した実践が多く見られるようになった。しかし、それらを基にして意見形成をする意見文では、これまでの指導に比して進歩しているかという点、それはほとんど感じられない。児童によって書かれたもので比較するならば、むしろ過去のものの方が優れていることが少なくないのである。

意見文は、論理的な文章形態の中で論理を展開していくことによって形式と内容を整えていくことで作成されると考えているが、現状では論理の展開が十分に行われているところまでは至っていない。

戦後の意見文の指導の経緯について石丸憲一（2011）¹では、昭和60年代の前後で量的にも質的にも大きな変化が見られるとしている。そして、昭和60年頃から意見文が急に書かれ始めた理由として、自治体主催の少年の主張コンクールが開催されるようになったことを挙げている。

このような外的な要因により書かれるようになったことの影響も含めて、本研究では、これまで時期により異なった取り組みがされてきた中で、形式と内容のバランスがどうだったかという質的な変化について、実際の児童による意見文を見る中で具体的に捉えていきたい。

戦後の意見文学習の変遷を児童が書いた意見文から読み取っていく資料として、静岡県東部の田方地区児童作文集『ささぶね』を使用した。

『ささぶね』誌は、静岡県旧田方郡、現在の伊豆市、伊豆の国市、函南町の3市町がつくる田方地区教育研究会が編集発行している。創刊は昭和26年2月。各号1～6年の6冊で構成され、当初は年間3号を発行していたが、現在は年間2号を発行し

ており、平成 20 年度末の時点で 164 号を発行している。このように『ささぶね』は、戦後から途切れることなく発行され、しかも収められている文章のジャンルも広い。また『ささぶね』の編集は各号につき学級 1 編の応募に依っていて、優秀作品が寄せられる傾向にある。基本的には各担任が各学期に書かれた作品中から選んで寄稿していることを考えると、掲載作品と国語の授業での実践の相関関係は充分にあり、戦後の作文指導史、意見文指導史を研究する上で貴重な資料の一つであると考えられる。もちろん、『ささぶね』誌の傾向が日本国内の作文教育の傾向と全く同じであるとは言えないが、その傾向をつかむ一つの指標となりうると考え、今回の研究対象の資料とした。

本研究では、泉子・K・メイナード (1997)² の、文を「コメント文」と「非コメント文」という二種類に大別して分析する方法を援用し、視点として次の 3 点について取り上げ分析していくことにした。

①コメント文の割合の変化

②文章中の分節によるコメント文の散らばりの変化

③「と思う」述語文の使われ方の変化

今回の研究方法として、この 3 点について数値の推移から小学生による意見文の変化を見ていくが、数値と実際の意見文を対照しながら考察することにより、量的な結果と質的な結果の両者を兼ね備えた研究となることを目指した。

1 コメント文の割合の変化についての考察

まず、昭和 30 年代から平成 16 年までの 6 年生の意見文 163 本について、10 年単位での全ての文の中でのコメント文の占める割合を求めた。163 本の意見文の年代ごとの内訳は、昭和 30 年代 11 本、昭和 40 年代 4 本、昭和 50 年代 5 本、昭和 60～平成 6 年 46 本、平成 7～16 年 97 本である。それぞれの意見文を構成する文の数の合計を見ても、昭和 30 年代は 251 文、昭和 40 年代は 63 文、昭和 50 年代は 68 文、昭和 60～平成 6 年は 914 文、平成 7～16 年は 2008 文と、昭和期の意見文の本数も文の数も平成期のものと比べて格段に少ない。また、先にも述べたように、意見文は平成期に入る頃から多く書かれるようになっており、多く書かれるようになる以前と以後との比較が本研究の重要な視点となると考えたこともあって、データには前者の合計である昭和期をまとめた数の割合も加えることとした。

コメント文の割合の推移を表 1 に示した。

表 1：10 年単位での全ての文数中のコメント文数の割合

	S30 年代	S40 年代	S50 年代	S30～50 年代	S60～H6 年	H7～16 年
コメント文の占める割合	55%	59%	63%	57%	45%	51%

表1を見ると、昭和30～50年代（以降「昭和期」とする）の方が昭和60年代以降（実際は、昭和60年、61年には意見文は掲載されていない。昭和62、63年も含めて以降「平成期」とする）よりもコメント文を含む割合が高いことが分かる。『ささぶね』に収められている意見文の平均の文の数は20.3文であり、昭和期の意見文は、1文章中にコメント文が11文から12文あることになり、平成期の意見文は、は、9文から10文ということになる。

コメント文でない文、非コメント文はそのほとんどが実際に起きたことや会話、事実と考えられる知識を記したものであり、平成期の意見文では、その非コメント文が占める割合が大きくなっている。表1では、昭和60～平成6年よりも平成7～16年の方が若干コメント文の割合が高くなっており、その原因について考えるために後者についてコメント文の割合が高い意見文を見てみる。（以降の引用文の下線は稿者による）

豊かさとは何か（H11年、144号）

わたしが思う「豊かさ」とは、自然を守ることだと思います。日本は今、工業が発達しています。そのため、森林がたおされ、また、いろいろな社会問題が起きています。

「自然を大切に」と言いますが、そういうことをうったえている人たちは、自然を大切にしているでしょうか。

なかには、守ろうと努力している人たちもいます。だから、わたしたちもその人を見習っていきたいと思います。例えば、電気や水の節約、好ききらいなく、何でも食べる、など考えれば、いろいろ節約できると思います。

まだ、豊かになるには、他にやることがあります。それは二つあります。

一つ目は、心を豊かにすることです。心が豊かになれば、毒物こん入事件や殺害事件がなくなる可能性が大いにあります。そうすれば戦争もなくなり、世界の平和が望めます。戦争は、罪のない人たちを何人も、いや何万人もの人を殺してしまいます。戦争で大変な思いをして、苦しんでいる人もいます。そんな国に手をさしのべるのが、心の豊かさというのでしょうか。

二つ目は、「日本の特長を生かすこと」です。国語の教科書には「日本は、水と緑にめぐまれ、四季の変化もすばらしい、自然の豊かな国」と書かれていました。その通りだと思います。日本は、四季の移り変わりがはっきりしているので、四季に応じた花や、緑が楽しめます。だけど、夏は台風、冬は大雪などと言った厳しさも自然は持っています。自然は少しでも理解し、愛し続けることが大切だと思います。そして、未来の子供たちにも、日本の特長を生かし続けてほしいです。

いっぺんにやるのは、とても無理なことだと思います。だから、最初は、

自分のできることから始めて、しだいにふくらませていけばいいと思います。
今やらなくては、いつやるのか分かりません。だからこそ、みんなの手で
始め、世界中の人たちと、本当の豊かさを実現してほしいと思います。

この「豊かさとは何か」を見ても分かるように、実質的なコメントをするための前置きのコメント文やコメントをいくつかに分けて、「～は○つあります。一つ目は～。二つ目は～」のようにナンバリングしながら見解を述べる例が多く見られる。また、結論部分での、「できることから」、「少しずつ」といった決まり文句とも言える言い回しが多く使用されている。これら形式的なコメント文を除くと、平成期の意見文の実質的なコメント文の割合はさらに低くなると考えられる。この表れとは逆に、平成元年から14年までの14年間で12本しかなかったコメント文が7割以上を占める意見文が、15年には7本中2本、16年度には10本中4本と多くなりつつある傾向も見られるが、この現象についても形式を整えるためのコメント文の使用ということで説明ができると考えてよいだろう。

逆に、コメント文が3割以下の極端に少ない意見文の数についても、昭和期の意見文では1例もないのに対して、平成期の意見文では15%程度が該当している。コメント文の少ない意見文を挙げてみる。

狩野川の自然（H14、152号）

夏休みに、狩野川の環境調査に参加しました。指標生物にはいろいろな生物がいますが、なかには少し気持ちが悪い種類もあります。

まず、網を流れのはやい所にしかけ、その前で石のどろを落としたり、足で石とどろがいっしょになっている所をけて生物の入ったどろが網の中に入るようにします。そのどろの中から出てくる生物をピンセットでつまんで、シャーレの中に入れます。ぼくは、この作業をしながらいろいろな生物の形のおもしろさがわかってきました。ヤマトビケラは、本当は幼虫みたいな形だけど、小さな石にも見えます。ヒラタカゲロウは、緑色の目や、日本の長いしっぽがあります。

次に、どんな生き物がいたのかメモしました。その中で指標生物をさがし、種類や数をチェックします。生物によってきれいな水を好むものと、きたない水を好むものがあります。それを四つの階級に分けて調べました。つかまえた生き物は、きれいな水にしか住めない生き物ばかりでした。狩野川の水は四つの階級のうちで一番きれいな川だと判断されました。

ぼくは、狩野川にゴミを捨ててあるのを見るのが多く、
（よれた川だなあ。）

と、いつも思っていたので、そのことはすごいおどろきでした。

最後に、ぼくたちを指導してくれた調査員の人たちが、田方郡の川のよごれの十年間の結果が書いてあるグラフを見せてくれました。狩野川は田方郡のグラフにのっている川の中で一番きれいな川でした。狩野川の上流には、きれいな川しか住めないヤマメがけっこういるそうです。

この調査を通して、狩野川はぼくが以前考えていたよりも、とてもきれいで、自然が豊かだということがわかりました。このきれいで自然があふれる狩野川は葦山町を通っています。葦山町に住むぼくは、それが自慢です。狩野川の自然を守っていきたいです。

この「狩野川の自然」では、狩野川での環境調査をしている時の出来事を書き記し、そこでのコメント文は途中で分かったことと、調査の終わりに分かったことに簡単に触れているだけで、あとは結論部での決意表明のコメント文のみとなっている。このように、事実あるいは事実と目されることを述べておいて、最後に簡単なコメントを述べるだけの意見文が多く見られるようになっているのも平成期の意見文の特徴であると言える。

2 文章中の分節によるコメント文の散らばりの変化についての考察

次に、意見文の中でのコメント文が文章中のどの部分に位置しているかを、コメント文の散らばりを見ることにより明らかにしようと考えた。一つの文章を機械的に四つに分け、その一つ一つの部分にどれだけの割合でコメント文が存在しているかを表したものが、表 2 である。

表 2：10 年単位でのコメント文の文章中における位置の割合

文章中の位置	S30 年代	S40 年代	S50 年代	S30～50 年代	S60～H6 年	H7～16 年
1/4	20%	15%	8%	17%	14%	15%
2/4	21%	20%	22%	21%	19%	19%
3/4	25%	28%	30%	27%	24%	25%
4/4	34%	37%	40%	35%	43%	41%

結果の数値で見ると限りでは極端な差は見られないが、昭和期の意見文では比較的前の部分からコメント文が多用される傾向にあり、平成期の意見文では後半にコメント文が多用される傾向にあると言えるだろう。コメント文が前半で使われるのは、序論及び本論の前半において、意見文を書くことになったきっかけとなる出来事への感想や感情について記述する場合が多い。このことについては、冒頭の四分の一の部分にコメント文の見られない割合を調べるとよりはっきりする。昭和期の意見文では

15%なのに対して、平成期の意見文ではほぼ2倍の29%に上っているのである。

これらの結果に基づくと、コメント文の散らばりについて次のように考えることができる。昭和期の意見文では、意見文の書き出しが生活経験などでの実感のある事柄を題材としており、その実感を課題として受け止めてコメント文という形で表現しようとしている。次に示した「公害と自然」では、そのことが顕著に表れていると言える。

公害と自然 (S48、67号)

わたしの家の前の山には、今は、山つつじが満開である。しかし、きものもようのように、ところどころしか咲いていない。

「むかしは、この山が、赤くなるほど咲いたけどねえ。」母は、山を見るたびにさびしそうに言う。

約十年前、わたしたち家族が亀石峠に来て、店を始めたころである。父母の話によれば、家の後ろは田が続き、山は赤土の所もあったそうだ。そのころの山は、五、六月になれば、山つつじでまっ赤になったという。

わたしの頭のどこかにのこっている3才ごろのきおくは、美しく山をそめていたつつじをほりだしては、車に積んでもっていく人々のことを思い出させる。小さな木も、大きな木も、かまわずほりだしてもっていく人々の姿を。わたしは、店からじっと見ていた。そして、わたしは、きれいな木をもっていくのを眺めるだけだった。今なら「自然をこわす人は、山にはいらなくてもいい」と、立てふだを立てることができるのだが、しかたないと思っても、なんだか悲しくなってくる。

それから十年後の山つつじは、少しずつふえてきて、きれいな花を咲かせている。つつじが、咲くころになると、わたしたち家族は、生き生きとしているように感じられる。

わたしたちの前の自然は、少しずつ緑が広がっていく。しかし、きれいな空気と水と栄養のある土、つまり山が無いと、自然は生まれてこないだろう。今の東京のように、スモッグで空は汚れ、排水で水は汚れていると、自然の、草も花も木も伸びてこない。美しい日本をつくるためには、公害をなくし、緑になることは、何年後であるだろうか。なるべくはやくそうなってほしい。

この意見文では、自分の家の前の山の自然が損なわれてしまい悲しい思いをしたという実体験が問題意識の発端となっている。そして、それを掘り下げていくことによって高度成長期における環境破壊というテーマに迫っている。そして、同時に自分にとって、自分たち家族にとって自然とは何かを考え、意見文が自分と向き合う場になっていると言えるだろう。

一方、平成期の意見文ではどうだろう。

心のユニバーサルデザインを広めよう（H15、153号）

去年、わたしたち六年生は、「静岡ユニバーサルデザイン大会」に出場しました。げきや模型、パネルなどでユニバーサルデザインの考えをもとにした新しい町づくりについて発表しました。

それからわたしはテレビや新聞などでいろいろなユニバーサルデザインを知りました。今、いろいろな商品にユニバーサルデザインの考え方がとり入れられてきています。

例えば、食器です。力がない人でも使えるスプーンなどがあります。車のユニバーサルデザインは最近トヨタのCMが登場しています。文具も左ききの人が使えるはさみやプニョプニョピンなどです。このように、さまざまなものにユニバーサルデザインが広がり、とても便利で快適になってきています。

しかし、一番大切なのは心のユニバーサルデザインではないでしょうか。心のユニバーサルデザインとは「互いを大切にしたすけあう心のこと」です。

心のユニバーサルデザインをつくりあげるにはまず、学校や町のみんなどふれあったり、人に親切にすることです。それができなければ、心のユニバーサルデザインはできないと思います。だから、ふだんから、人に親切なことや人とのふれあいなどをふやし、いろいろな人との交流を通して、心のユニバーサルデザインを広めていけば、よりよい町づくりもできるのではないかと思います。それに、よい学校づくりもできると思います。

だから、これからの未来を明るく住みよい地いきにするには、一人一人の考え方を変えていくことが大切です。

そのためには、自分が変わる努力をすることが大切なのではないでしょうか。

みなさんも、「心のユニバーサルデザイン」について考えてみてください。

そして、よりよい学校や町を作っていきます。

この例文では、一見、「静岡ユニバーサルデザイン大会」に出場したという生活経験について書かれているようだが、そのことについての広がりはなく、その後は知り得た知識を書き並べることで展開されている。このように、平成期の意見文では、どちらかというと実感のない漠然とした課題意識から書こうとすることが多く、実感のこもっていない情報として与えられている事実や知識を書き連ねていくと考えられる。このことについては、比較的簡単に情報を得られる現代のメディア事情によるところもあるだろう。その辺りのことは、意見文の作成過程での取材の仕方などの実態についての研究も必要ではあるが、今回は触れないでおく。この冒頭部分でのコメン

ト文の有無については、必ずしもある方がよいというわけではないが、事が表現意欲の喚起、創構の充実に関わっているのであれば、看過できない問題であり、さらに深く考察していくことが必要であろう。

3 「と思う」述語文の使われ方についての考察

最後に、コメント文の中であって、自分の感じていることを記述したり、主張をしたりするに当たり使われることの多い「と思う」述語文（本研究では、「と考える」述語文に類するものも含めて考えた）がある。「～だ（である）」と言い切れない場合に使われる「と思う」と同じ働きをする文末表現としては、「だろう」や「かもしれない」などがある。しかし、「と思う」には明確に言い切りたいが、若干の遠慮も込めたいという書き手の思いを反映させるなどの便利さがあるゆえ、意見文においては多用される傾向にある。このことについて小林一貴（2001）³では、高校生の意見文中で8割を超す割合で使われていることを報告している。

特に、文章表現能力の発達途中の段階にある小学生の意見文では、「と思う」を明確な意図を持ってというよりも曖昧で多様な意味をもつ便利な言葉として使っていると推測でき、それが意見文のスタイルにも影響を与えていることが考えられる。そこで、「と思う」述語文のコメント文としての使われ方及びその変化について考えてみることで、意見文のスタイルの変化について考える。

データ作成の手順として、まず、一つの文章の中にどれくらいの「と思う」述語文が含まれているかを10年単位で求めた。次に、それぞれの意見文を4等分し、その後半1/2と終わりの1/4に存在するコメント文のうちの「と思う」述語文の割合を求めた。その結果をまとめたものが、表3である。

表3：10年単位での、1文章当たりの「と思う」文の文数と、文章後半での出現の割合

	S30年代	S40年代	S50年代	S30～50年代	S60～H6年	H7～16年
1文章中の「と思う」文数	3.2	4.3	5.0	3.9	3.2	3.2
後半の「と思う」率	81%	65%	68%	73%	75%	70%
終わり1/4の「と思う」率	51%	29%	42%	43%	56%	49%

「と思う」述語文の1文章中の文数については、昭和期に比べて平成期の意見文の方が少ない傾向にあると言える。特に、昭和40～50年代と比べるとその差はかなり大きい。一方、一つの意見文の中での「と思う」述語文の散らばりは、それほど顕著なものとは言えないが、昭和40～50年代でやや終わりの部分に少なく、前半にその分が配分されていると見ることができる。

実際の意見文では、次のようになっている。

大学生のデモについて (S43、53 号)

このごろニュースで、よく大学生のデモについてのフィルムを見ることがある。

けいかに石をなげて、けんきょされた人もいるらしい。わたしは、ニュースを見て、「なにしてんだろ。バカみたいだな。」と思った。

母に、

「どうして、デモなんかやるの。」

と聞くと、母は、

「なぜかねえ。」

と、わからないようすだ。

どうして、けいかとけんかみたいなことをするのか、と思う。わたしは、デモということに、疑問をもっている。わたしは、デモをする大学生に抗議してみたい。そして、もうちょっと、おだやかなやりかたで、やってほしいと思う。デモなんかしなくたって、話合いで決めれば、かたづく問題じゃないのかなと思う。

だけど、大学生にも、デモをするだけのわけがあるのかもしれない。もっと大学生の意見も尊重してやるべきだと思う。

デモのとき、大学生をけんきょしたりするけいかんも、たいへんだと思う。

これから新しい世界を作っていくために、いつまでも、「大学生が、大学生が」と、いってられないと思う。大学生は深く考えて、いい方法を行動にうつしてほしいと思う。

先生が、社会科の時間に、わたしたちに、こういって話してくれたことがある。「いくら日本が民主主義だといっても、なんでもかんでも自由にして、かってなことをやってしまっていていいだろうか。」

と、そういわれて、わたしは、また大学生に深い反感をいだいた。

わたしもあるていど、なんでもかんでもかってにするしかたを改めた方がいいと思う。そして、あらそいのない、いいニュースで、ことをはこべばいいと思う。

30 年代の意見文については、意見文というジャンルが未分化で、前半が生活作文で後半に意見を述べるというものが多い。そこでは少ないながら後半に「と思う」述語文が出現していると捉えられ、この例文についてもその傾向が見られる。しかし、文章中の「と思う」の使い方を見ても、その中にも自分の意思をしっかりとって「思索」しながら、結論に結びつけようとする意識が感じられる。大西道雄 (1990)⁴ は、意見文を「感想型」「思索型」「解決型」の三類型に分け、「思索型を中核に位置付け、系統化を考えるのがよいと思われる」としている。この「思索」という視点で意見文のあり方を改めて見直し、意見文を「思索」の結論ではなく、プロセスを表現したものだと思えるならば、昭和期の意見文指導に学ぶところは大きいと言えるだろう。

一方、平成期の意見文では、もともと「と思う」述語文が少ないこともあって、終わりの四分の一、つまり結論部に約50%の「と思う」述語文が集中している。当然ながら、文の数としては多くない。例文「地球を大切に」を見ると、「と思う」が終わりの4文の内の3文に使われているだけであり、その使い方も「～したと思う」「～すればいいと思う」というように今後の行動を示す用法に限定されている平成期の顕著な例であると言える。

平成期の意見文を例として挙げる。

地球を大切に（H2、119号）

今、酸性雨などの公害で、世界中の国々が頭をなやましています。その公害には、赤潮、石油汚染、酸性雨、オゾン層の破壊、地球の温暖化などがあります。この公害は、みんなわたしたち人間が作り出しています。

海や湖に発生する赤潮は、人間が流した台所用洗剤や油、洗たく等の生活廃水であることが解明されています。赤潮になると海水中の酸素が不足したり、微生物の出す毒素などで魚や貝が死滅してしまいます。この他にも、空かん、空びん、プラスチック、化学物質、放射性物質、ちゃんと処理されていない下水などです。

もう一つ海を汚すもので石油があります。巨大タンカーの事故や、海底油田の事故などで石油が流れ出すと広い海域がいつべんに汚れてしまいます。そして魚や貝ばかりでなく、鳥やほ乳類にまで被害をおよぼし、ほおっておけばさらに被害を大きくします。地球上の生物はもともと海から発生したものといわれています。わたしたちの命のもとの海なのです。だれもが海を汚したいとは思っていないけれど、無意識のうちにゴミや廃水を出し汚れをどんどん進めています。その大きな原因は、広い海だから、広い土地だから、自分一人ぐらいちょっと汚してしまってもだいじょうぶだという甘い考え方です。簡単そうで難しいのがゴミの処理。まず自分でできることから、個人個人がよい気を使って、なるべくよいけいなおみを出さないようにしたいと思います。

地球は今、公害でほろほろになっています。この重い病気の地球をなおすには、まず世界中の人々が自分のことから、一步一步始めていけばいいと思います。まず、わたしは、学用品を大切に、紙やプラスチックのゴミを出さないようにしたいと思います。

また、この例文には当てはまらないが、書き手自身の思いを強く出す箇所であると考えられる文章末尾の最終文での「と思う」述語文の出現率は、昭和期が65%、平成期が52%であり、平成期の児童が「と思う」に自分の思いや主張を込める度合いは、

昭和期に比べて弱くなっていると言えるだろう。

ところで、「と思う」述語文の用法について先行研究では次のように整理されている。森山卓郎(1992)⁵は、「と思う」の用法について「不確実用法」と「主観明示用法」を挙げている。前者は「話し手自身が本来分らないものとして捉えているのではなく、独断として話し手自らの認識を表すもの」であるとし、後者を「個人的な意見を述べるもの」と定義している。また、国澤里美(2010)⁶は、「自分の感情を述べる表現」と「自分の判断を述べる表現」という二つの用法に分けて論じている。

稿者は、森山の二つの用法に、国澤の挙げている「自分の感情を述べる表現」を加えた三つを「と思う」述語文の用法と考え、実際の意見文中の用例に当たることとした。各年代の児童が、〈不確実であることを示す機能〉〈考えを相手に示す機能〉〈感情を婉曲に伝える機能〉の三つをどのような場面で、どのように使っているのかを見ていく。

〈不確実であることを示す機能〉について

この場合の「と思う」は「だろう」や「かもしれない」と置き換えられ、推測の意味が強いものである。その事柄が真実であるかどうか、その度合いを考え不確実さが高い場合に使われるのだが、小学生がその度合いをいちいち分析し、「と思う」という文末表現を使用することは多くないようである。そのような場合は、「かもしれない」や「ちがいない」、「でしょう」が使われることが多い。しかし、平成期の意見文では、確実だと思われることでも、強く出ることを控えて、一見不確実に感じられるような表現をするために、「と思う」を使用している場合が少なくない。

〈考えを相手に示す機能〉について

昭和期、平成期を通じて、この機能で多く使われているのは、「～だといいと思う」や「～するといいと思う」という形である。希望を表明するために「と思う」を使用しているのだが、どちらかという他者に対する希望、あるいは変化自体を望んでいることを表すためのものである。

平成期になると、特有の使い方も見られるようになる。「～たいです」や「～していきたいです」という形である。こういう形の考えを提示する方法が多くなることと相俟って、意見を述べるというよりは自分の行動を振り返り、行動に方向性を見出すというタイプの意見文が多くなっている。それらは、大西道雄(1990)の言う「解決型」の意見文であり、「思索」を飛び越して「解決」に向かってしまったことによるものと考えられる。

〈感情を婉曲に伝える機能〉について

「うれしい」「悲しい」「好きだ」「嫌いだ」といった感情を表す形容詞や感情動詞に接続して使われる場合や、全く実現する意思がない場合の希望などに働くものである。

これは、自らの経験を題材として意見文を展開する場合に、自分の感情を表現するために使われるのであり、直接的な経験ではなく本やテレビからの間接的な経験を題

材にした場合にはほとんど見られない。したがって、昭和期にはある程度見られるが、平成期の意見文にはあまり見られないものである。

このように「と思う」述語文の使われ方について見てきた結論として、昭和期の意見文では、他者を意識した「と思う」述語文の使い方をしており、平成期の意見文では自己を意識した使い方になっているということが言えるだろう。そして、意見文に求められる主張性の大きさについて言えば、昭和期よりも平成期の意見文では主張性が弱くなっていると言える。意見文指導に際して、小学生が意見形成をすることに意味や意見形成の方法を具体的に示すことが今まさに必要であるということだろう。

終わりに

昭和30年代以降に小学生が書いてきた意見文を、昭和期及び平成に分け、コメント文、非コメント文という観点からその傾向を探ってきた。はじめに書いたように、『ささおね』の傾向が全国の傾向とぴったり重なるとは限らないが、その一端を明らかにするものとして考えてよいだろう。そこで見えてきたことは次の三点である。

1. 文章全体のコメント文の割合の変化から見ると、昭和期に比べて平成期の意見文はコメント文が少ない。
2. 意見文の文章全体でのコメント文の散らばりの変化から見ると、昭和期の意見文は前半から使われやすく、平成期は結末部に偏る傾向がある。
3. 「と思う」述語文に注目してコメントの仕方を比較してみると、平成期ではより婉曲に自分の意見を示そうとする意識が見られる。また、結論の向かう方向として、昭和期には社会や他者の変化を促すものが多かったが、平成期では自らに求めるものが多くなっている。

以上のように、これまで昭和期から平成期にかけての小学生の意見文を整理し、考察する中で、序論、本論、結論の構成やナンバリングなどを取り入れて筋道立てて書くことなど確実に論理的文章を書く技術は高まっていると言える。しかし、意見文というジャンルの文章に求められている重要な要素である主張性については、むしろ弱くなっていることが今回の研究から見えてきた。

稿者は、意見形成について、どのような問題意識で、どのような情報を基にして、どのように結論を形成するのかという三点によって意見文の根幹部分が形作られると考えている。しかし、平成期に書かれた意見文を見ると、ニュースで語られているような広く社会的で一般的な内容のゴールを目指して、そこに行き着くような論の形成をしたという作られ方をしたものが多い。これは、小学校における意見文指導において、形を整えることは十分に指導されているが、意見形成を支える創構についての指導は十分になされていないことに起因すると考えられる。意見文が意見文として機能するための最も重要な要素はしっかりとした意見が述べられていること、主張性の

強さである。

では、主張性がある意見文とはどういうものか。それは、読み手に分かりやすい、伝わりやすい表現の仕方でおかつ、内容の濃い意見、主張であると言える。いくら主張が強くても、それがうまく読み手に伝わらなければ意見文として成功したとは言えない。つまり、意見文の主張性のよしあしは、結論部分だけに注目すればよい問題ではなく、文章全体の論の組み立てによっていかに主張しようとしているかにかかっている。

平成期の意見文の主張性が弱くなっているのは、平成期の意見文の主張が結論部分だけで行われているものが多く、文章全体での意見形成という視点が欠けているからであり、現在の意見文指導の課題がそこにあると言えるだろう。

以上の考察をふまえて、小学生の意見文指導における創構のあり方や指導方法について具体的な方略を示すことについて今後さらに研究を深めていきたい。

注

1. 石丸憲一（2011）「地区作文集『ささぶね』にみる意見文の論証的要素の出現の様相」（『国語科教育』第 69 集、全国大学国語教育学会、pp.16-29）
2. 泉子・K・メイナード（1997）『談話分析の可能性－理論・方法・日本語の表現性－』くろしお出版
3. 小林一貴（2001）「意見の形成における情報の固有性と共有性」（『国語科教育』第 50 集、全国大学国語教育学会、pp.34-41）
4. 大西道雄（1990）『意見文指導の研究』溪水社、p.38
5. 森山卓郎（1992）「文末思考動詞「思う」をめぐって－文の意味としての主観性・客観性－」（『日本語学』Vol.11、明治書院、pp.105-116）
6. 國澤里美（2010）「日本語学・認識を表すモダリティ形式「ト思ウ」の許容度に見られる世代差」（『学術情報メディアセンター紀要』Vol.16-1、熊本県立大学 pp.101-114）

The Aspect of Changes in Opinion Essays of Elementary School Students after the WWII

Kenichi ISHIMARU

Abstract

In this research I attempted to observe the specific quality changes on how formalities and contents balance each other in actual students' opinion writings in view of the fact that various types of efforts to teach opinion-essays in elementary schools were made at different periods in the past. By classifying each sentence in the students' opinionessays into two categories of "commenting sentences" and "non-commenting sentences," I analyzed them focusing on the three changes listed below:

1. Changes in "commenting sentences" ratio.
2. Changes in the locations of segment in an essay in which "commenting sentences" are placed.
3. Changes in usage of "I think..." sentences.

As a result, the following three findings were observed:

1. The opinion writings in Heisei period have less number of "commenting sentences" than in Showa period in regard to the changes in "commenting sentences" ratio in the whole essay.
2. By analyzing the changes in "commenting sentences" locations in the whole opinion essays, they appeared more often in the segments of the first half of the writings in Showa period; on the other hand, they tended to be located towards the end in Heisei period opinion-essays.
3. When I compared the ways of making comments for the view of how "I think..." sentences are used, there were tendencies to show opinions more euphemistically in Heisei period. Regarding how conclusions were expressed, in Showa period, there were more comments urging the society and others to change, while in Heisei period, there were more comments expecting themselves to change.